令和７年度　保育園調査研究事業（研究報告）

１　施設名

ぴっころきっず谷町園

２　研究テーマ

幼児期に様々な楽器にふれれるように、指導方法を研究し、音感・リズム感・感受性・協調性を育てる。

３　研究内容

（１）実施期間

令和7年4月～令和8年3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

園長・佃勝代・幼児担任

（３）研究のねらい

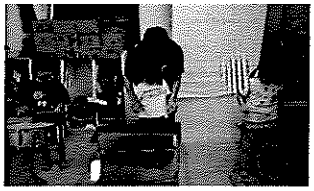
・様々な楽器に触れる体験を通して音や表現する楽しさを味わう
・本物の音楽に触れ、豊かな感性や聴く力を育む
・子どもだけでなく職員も学び合い、音楽活動を豊かにする

（４）研究対象者

3歳～5歳園児

４　実践内容

・新しい楽器に自由に触れる時間を作り、職員と共に楽しむ
・リズム遊びや簡単な合奏活動を実施
・音の違いに気づけるよう「高い音、低い音」「長く響く音」などが言葉掛けを行った
・１２月には大阪市音楽楽団合同鑑賞会に参加しプロの生演奏を鑑賞した



5　研究のまとめ（研究成果）

・本実践を通して子どもたちは様々な楽器に触れ、それぞれの音の違いや楽器ごとの特性に気づき、自ら試したり比べたりする姿が多く見られた。
・特に自由に楽器に触れられる環境を設定したことで「どうしたら大きな音が出るのか」「優しい音にするにはどうしたらいいのか」といった探究的な姿勢が育まれた。友達の奏でる音に耳を傾け、真似したり応えたりする姿も見られ、音を通したコミュニケーションが自然に生まれていた。
・プロの演奏鑑賞では、音の迫力や響きに集中して聴き入る様子があり、生演奏ならではの振動や空気感を身体で感じ取ることができた。日常の音遊びにも変化が見られ、保育室での自発的な合奏やリズム遊びが増加した。
・職員も「教える」のではなく、「共に楽しむ」姿勢が生まれ、保育者の表現力も高まった。音楽活動を特別な時間に限定せず生活や遊びの中に自然に取り入れる意識が強まった点は大きな成果である。

6　課題

・ただ楽器の数や設置するスペースの問題、音量調整や活動時間など近隣住民への配慮、環境面の課題はまだ多く残っていることは現状である。

令和７年度　保育園調査研究事業（研究報告）

１　施設名

大阪市立森小路保育所

２　研究テーマ

幼児期に必要な基礎的な絵画について、指導方法等を研究し表現力を養う

３　研究内容

（１）実施期間

令和7年4月～令和8年3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

株式会社サクラクレパス　講師　吉田　朱美

（３）研究のねらい

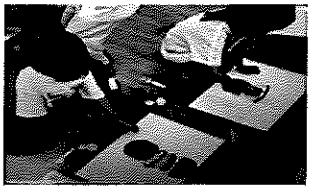
幼児期における絵画活動の指導方法を研究し、子どもが自分の感じたことや経験したことや経験したことを自由に表現できる力を育む

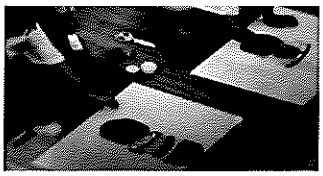
（４）研究対象者

5歳児

４　実践内容

幼児がハンバーガー屋さんになったつもりで、パンの形をハサミで切り、のりで張り合わせた後、クレパスや絵の具を用いてハンバーガーの具材やお店の様子を自由に描く活動を行った。活動では、子どもたちが想像を広げながら主体的に表現できるよう、保育者はハンバーガ屋さんのイメージが広がるような声掛けをおこなった。また、ハサミ・のり・絵の具など様々な用具を使うことで、制作の楽しさを感じながら表現活動に取り組めるように援助した。子ども一人ひとりの発想や表現を大切にし、完成を急がせるのではなく、自由に描いたり作ったりする時間を保証した。





5　研究のまとめ（研究成果）

活動では、子どもたちはハンバーガ屋さんのイメージを膨らませながら、具材の色や形を工夫して表現する姿が見られた。『トマトを入れた』『大きいハンバーガーにした』など、自分の思いを言葉で伝えながら制作を楽しむ様子も見られた。ハサミやのりなど用具を使った制作活動と、自由に描く活動を組み合わせることで、子どもたちは自分のイメージを形にする楽しさを感じることができた。保育者が完成の形を示しすぎず、子どもの発想を受け止めるかかわりを行うことで、主体的な表現活動につなげることが分かった。実践を通して、幼児期の絵画活動では、技術の習得だけでなく、子どもが自由に発想し表現できる環境を整えることが重要であることか明らかになった。また、題材を子どもにとって身近でイメージしやすいものにすることで、表現への意欲が高まり、色や形を工夫しながら主体的に活動する姿が見られた。さらに、保育者が子どもの表現に共感し見守る関りを行うことで、子ども一人ひとりの個性豊かな表現が引き出されることが分かった。

6　課題

今回の実践では、子どもたちはハンバーガー屋さんのイメージを広げながら楽しんで制作する姿が見られた。一方で、ハサミやのり、絵の具など複数の用具を使用する活動であったため、用具の扱いに慣れていない子どもは戸惑う場面も見られた。また、表現活動では、子どもによって発想や制作の進み方に違いがあり保育者がどのように援助するかが重要であると感じた。今後は、一人ひとりの発想や経験に応じた関りを意識しながら、子どもがより主体的に表現できる環境や指導方法について工夫していくことが課題である

令和７年度　保育園調査研究事業（研究報告）

１　施設名

大阪市立平野西保育所

２　研究テーマ

昔あそびを楽しむ活動を通して、みんなと遊ぶことが楽しいと実感し話あったり工夫したりすることで、人と関わる力、あそびを考えたり創造したりする力、協調性を育む為の保育士の関わり方を研究

３　研究内容

（１）実施期間

令和7年4月～令和8年3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

昔遊び講師　川口　彩

（３）研究のねらい

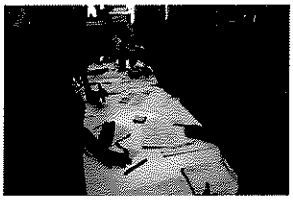
育成すべき資質・能力の3つの柱　①知識・技能の基礎　②思考力・判断力・表現力の基礎　③学びに向かう力・人間性（心情・意欲・態度）という教育的意図をもって保育所がどう児童へ、関わるのかがねらい。

（４）研究対象者

５歳児14名（令和7年度）

４　実践内容

8月～2月の期間中7回。午前中、5歳児の子どもたちが遊戯あそび、道具あそび、身近にあるもの（自然物含）を使った遊びを指導者より教わり、楽しんでいる様子と保育者の関わりをビデオ撮影し午後より鑑賞。昔遊びの前回の育みポイント（ふれあい・協力の心・唄の効力・情緒・身体のバランス・想像力・技と反復・発想力・リズム・ルールと判断力）を振り返り子どもの姿より発見したこと、工夫点・課題点を見つけ出し保育者の各回のテーマに沿った関わりを考察した。



5　研究のまとめ（研究成果）

1回目は昔遊びの歴史とあそびの効能・基本的な昔遊びのポイントを学ぶ。
2回目からは児童の姿をビデオ鑑賞し、昔遊びのおもしろさや楽しさを伝える為、保育士はどんな工夫をして児童へ関わるか。
3回目は児童の遊びを通しての気づきを引き出すため、保育士はどんな言葉掛けをするのか。
4回目は児童が自らあそび考え想像するために保育士はどう関わればよいか。
5回目は児童が話合ったり、ルール作りをしたり仲間意識を養うために保育士はどう関わるのか。
6回目は友だち同士披露しあう事でお互いの姿を見る、聞く、話す機会を持った時の保育士の言葉掛けについて。
最終回は今までの研究全体の評価・考察。

遊びを通して子どもたちは何を感じ、何に気付き何が出来るようになるのかという視点を持ち、子どもを観察することで、みんなで遊ぶ楽しさ、自分自身の良さ、可能性に気付く姿を引き出した。また、子どもが気づいたり出来るようになったりしたことを使って、どう考え、試し、工夫・表現したのかと言う視点を持ち、観察することで遊びを工夫したり、話し合い表現することが出来る機会づくりの大切さを知った。みんなと遊ぶ事、生活が楽しくなることを実感することで、人と関わりながら生活する思いを育てる視点で観察することで、いかにより良い生活を営む力を育てるかの目標に近づけた。

3つの柱を念頭に昔遊びを通してそれぞれの遊びの持つ効能を理解し、生きる力を育てるための必要な力の結びつきを知り、教育的意図を持った関わりの大切さを改めて実感した。

保育士のかかわり方により、子どもの育ちが大きく左右される場面もあり、必要な時だけ支援する関わりは子どもの主体性や協調性を引き出していた。保育士が「どのタイミングで関わるか」「どこまで見守るか」を見極めることが子どもの育ちを支えるうえで極めて重要であると感じた。

6　課題

・伝統的な昔遊びの良さを保護者へご理解して頂き、家庭の中で継承して頂ける環境を整え、日本の伝統文化を大切に思う心情を育て、次世代へ継承させていく。

・小学校へとつながり、継続的に遊べる時間と場所の確保

・保育士の見守りと支援のバランスの難しさ。

・友だち同士で遊びを作っていける環境作り

令和７年度　保育園調査研究事業（研究報告）

１　施設名

鶴見学園

２　研究テーマ

音楽活動（演奏会、マーチング演奏）を通じて就学前の子どもの表現活動を豊かにする

３　研究内容

（１）実施期間

令和7年　4月　～　令和8年　3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

関西幼児音楽協会　理事長（兼音楽講師）　杉本　圭

（３）研究のねらい

友だちと一緒に演奏することで、協力する楽しさやチームワークの大切さを知り達成感を味わう

（４）研究対象者

3歳児～5歳児

４　実践内容

3歳児　：　１～１０までの数字の理解、リズムを使って知能育成
4歳児　：　導入歌（どんぐりさんのお家）指番号の歌１～５までの理解　音の階段（音階を覚える）　鍵盤ハーモニカの正しい指使いの習得
5歳児　：　3～4歳での指導を習得したのちマーチングや合奏に向けて準備に入る
令和7年11月12日　運動会
4歳児、5歳児によるマーチング　演奏曲：「手のひらを太陽に」　楽器の種類：シンセサイザー、音階ドラム３、トリプル２、　小太鼓３　を使用
令和8年3月7日　関西幼児音楽フェスティバル　5歳児　演奏曲：「花は咲く」「手のひらを太陽に」　楽器の種類：シンセサイザー、スタンドシンバル、コンサートドラム、ティンパニー、スネアドラム、バスマスター、ビブラフォン、鉄琴、マリンバ、ツリーベルを使用

5　研究のまとめ（研究成果）

運動会
4月22日　5歳児全員によるリズム打ちの練習を行う　音階ドラム、トリプルのメンバーを内定する。　同時に演奏曲の決定
5月20日　ドラムマーチのリズムを講師から指導を受ける　楽器ごとのリズム表の作成（ドラムマーチ用）　楽器ごとの楽譜の作成
１．ドラムマーチ導入法①言葉のみで繰り返し練習（暗譜導入期間）②言葉や手で合わせて練習（リズム導入）③足ふみ+言葉+手で繰り返し練習（マーチング導入期間）　④バチを持って+足ふみ+言葉+手で練習（楽器導入期間）⑤楽器を持って練習（アンサンブル期間）
２・シンセサイザー、バスマスター　①楽譜を見ながら音階で歌う　②暗譜ができたら鍵盤を使って練習
３・各々の楽器が暗譜できたら少しずつ楽器の種類を増やしていきながら練習する
４・楽器を持って練習を繰り返し行う　（静止演奏）⇒足ふみへ進む
５・園庭に出て練習していく（静止⇒足ふみ⇒フォメーション）
６・　4歳児の振り（サンバ棒を持って）と合わせる　繰り返し練習　令和7年11月12日（水）運動会当日マーチング披露　「手のひらを太陽に」　　関西幼児音楽フェスティバル　令和7年11月19日　音楽講師との協議で演奏曲を決める　①「花は咲く」に決定したことで担当楽器を決める　②それぞれの楽器の楽譜を作成し担当楽器を暗譜していく　③担当楽器の個人練習を繰り返し行う　④暗譜できたらすこしずつ楽器の種類を増やしていきながら練習をする　⑤全員そろっての練習を毎日繰り返し行い他の楽器と自分の楽器をあわせること、指揮者を必ず見て演奏することを身に付けていく　⑥「花は咲く」が完了したら「手のひらを太陽に」の練習に入っていく。　令和8年1月24日生活発表会で演奏「花は咲く」　⑦2曲を練習し完成させて行く　　⑧　令和8年3月7日（土）　関西幼児井音楽フェスティバル当日出場、演奏曲「花は咲く」「手のひらを太陽に」

6　課題

・5歳児クラスは14名と少ないため楽器の種類が少なくなり演奏に重厚感が感じられなかった
・3歳～5歳までの3年間の継続してのカリキュラムになっているが子どもたちの成長過程を保護者が知る機会を増やしたい

令和７年度　保育園調査研究事業（研究報告）

１　施設名

鶴見えのもと保育園

２　研究テーマ

「子どもの脳教育プログラムを通じて、子どもたち自らが身体・心・脳の事を知り活用して【自分も幸せ、周りの人も幸せ、地球も幸せ】に生きていく為の学びに向かう力、人間性を向上させる」

３　研究内容

（１）実施期間

令和7年4月～令和8年3月

（２）講師の所属・役職・氏名等

イルチブレインヨガ　ブレイントレーナー

金　心錫先生　中村　仁美先生　斎藤　雅代先生

（３）研究のねらい

丹田たたき、全身Tapping、友だちとのふれ合いあそび（ブレインスポーツ）瞑想等一連の流れを通じて、子ども達が自ら身体、心、脳を感じることで自分を知り、コントロールし、人とのつながりを感じる

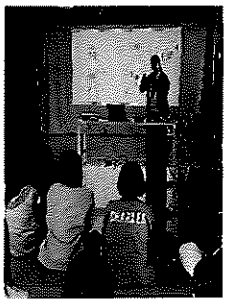
（４）研究対象者

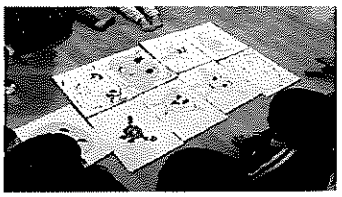
4，5歳児　保護者　保育士

４　実践内容

今回実施した脳教育プログラムは、専門講師にお越し頂き脳教育のブレイン体操を9回（保育士の講習と保護者参加の親子体験を含む）して頂きました。そのうちの3回は保護者にも参加出来る様にし親子体験としました。子どもだけの脳教育ブレイン体操の場合、以下の順番で行います。
①初めに自分の体の中心、エネルギー源の丹田を認識する為、丹田を叩き100回行いその後、頭、手、足、背中等をなでたり、身体全体に刺激を与え自分の身体を感じ自分の身体のbody imageを認識します。
②風船あそびなどのゲームやピザ腹筋で友だちとの距離感、協力、ふれ合いを通じて一体感を感じます。
③最後、cool dawnで自分の身体、心、脳に戻り自分を認識します。自分の身体に集中する為に腹式呼吸をし、背筋を伸ばした状態であぐらをかき、頭に（お手玉や絵本）をのせて、静かに呼吸をします。
この一連の流れを通して頭がすっきりして集中力もアップします。そして回りの人達を感じ共感を呼びさまします。子どもたちに体操の前と後に人型が書かれた用紙に自分の身体の感じを表現するのに色を塗ったり白紙にうずまきを子どもたちに描いてもらい表現の仕方の違

いをみました。また自分の頭で考えるということを子どもたちにわかりやすく伝えるために「のうちゃん」というキャラを用いて伝えていきます。自分の考えやこころの声を表現できる様にし、子ども同士のけんか、内省する時に自分の「のうちゃん」の声をききます。親子教室では、講師の先生により一連の流れを保護者と一緒に行い親子でむかい合い「愛してる、大好きだよ」とハグをし合いました。親や友だちとふれ合う中で身体を動かすことにより、お互いを認め協力し、一つの共同体としての心の充実感、自己肯定感も上がりました。体験後に取ったアンケートでは「子どもから聞いていた丹田の経験など共有出来てよかった」「活発に動くことと落ち着く時間のメリハリが大切だと感じた」「体を動かしながら脳をマッサージしているような感じ」との意見も頂きました。そして「普段落着いて脳を使う事がなかった事を改めて感じた」「お手玉をとった後、重さが残っている感覚におどろいた」などの意見がありました。





5　研究のまとめ（研究成果）

資質能力の3つの柱のうち、心情、意欲、態度が育つ中でよりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」の資質能力が日常のストレスや回りの人の見え方環境の中で自分が持っている本来の力を出せていない状態から開放してくれるプログラムです。
子どもたち、保護者、保育者全員が自分自身本来の自分の身体、心、脳を認識して大切にすることで自己肯定感も上がり回りの人たちを大切にし、共生していける本来人間が持っている力を再び感じることができます。
脳教育プログラムで、心身のバランスを整え、脳の発達を促すことを目標としており、以下のような効果があらわれたと思います。
1.　脳の柔軟性向上：ブレイン体操で子どもが脳を使ったり、「のうちゃん」と会話することで、思考力や記憶力、創造性が向上し、学習能力全般に良い影響を与えました。
2.　集中力と注意力の向上：ブレイン体操と呼吸法を組み合わせることで、集中力や自己制御力を養うことができます。これは小学校にあがっても学習の効率を高め、学校の成績向上にも寄与すると思います。
3.　情緒の安定：ストレスや不安を和らげ、感情のコントロール能力を高めることで、子どもの精神的な安定が図れます。心の平穏を保ちながら成長を支援します。また回りの人達との協力、共生が自然とできる様になっています。
4.　身体と脳の連携強化：ブレインスポーツにより、脳と身体の協調を高め、身体感覚や運動能力を向上させます。これにより、運動神経の発達が促進され、手先の器用さやバランス感覚が向上しました。
結論として保育園児の情緒の安定や自己肯定感の向上に寄与していることが伺えました。プログラムを通じて、子どもたちは自分の感情や思いに向き合い、前向きな変化を遂げています。

先生のアンケート
①話を聞く姿勢が育った②自分で考え行動する姿が増えた③行動の切りかえが自分で出来ることが増えた④瞑想でリセットできるようになる⑤子どもが落着いて見守れるようになった⑥集中力、活動への入りが良くなった⑦瞑想でじっとできる時間が増えた⑧先生も一度行うと続けたいと感じる様になった

6　課題

日々の生活の中でIT化が急激に進んだ事により、子どもたちが日常生活の中で自分の身体を使うことが激減しています。その事により心も脳も育つ機会が減っていることが現代社会の特徴だと考えています。この環境を踏まえた上で幼児教育では今まで生活の中で子どもたちが自然と学んだ事も完成して学ばせていかないといけない時代に入ってきた様に感じております。保育園では今まで以上に身体を使った遊びを行いその事で心で感じること自ら考えること、行動したことで自信を持って生きていく事を他の人と協力、共生して人間らしさを育む環境が急務だと考えました。その一つの方法としてこの脳科学ともとに考えられた脳教育は有効な方法だと感じております。しかしそれを子どもたちの中に継続していくには、導いていくトレーニングできる人材と小学校に行っても脳教育プログラムを出来る環境が持続できる様にしていく事が課題となるでしょう。